

スキーボード学習を支える前提に関する一考察

越川 茂樹

A Pedagogical Study Supporting the Premise of Learning the Skiboard

Shigeki Koshikawa

Abstract

This paper examines the premise of how learning to use the skiboard contributes to greater innovations in school-related sports. As for the actual teaching of how to use skiboards, this paper will examine two viewpoints: teaching and learning the proper technique for obtaining a smooth glide on the snow; and teaching and learning about various enjoyable activities that can be performed with skiboards.

This paper will discuss the preceding points in the following manner:

- 1) The teaching and learning of how to use skiboards properly in obtaining a smooth glide on the snow is based on the assumption that the motor senses used are similar in nature to those used for traditional skis.
- 2) Interest in learning to use skiboards for enjoyment is supported by other aspects of "youth culture" such as the pursuit for excitement and the quest to find an avenue for self-expression.

Keywords : Skiboards, Learning, Technical tools, Activities, Enjoyment

I. はじめに

今日の人々とスノースポーツの関わり方を見ると、アルペンスキー、テレマークスキー、クロスカントリースキー、ならびにオフピステの滑走といったスキー活動、スノーボード、スノーシューなどさまざまである。このことは、楽しみ方の指向や遊び方の形態、そしてそれに伴う用具などが多様化していることを内包している。

スノースポーツをめぐっては、健康や生きがいを求める人々の生活文化として重要で、魅力ある活動となることへの期待から、前記のようなさまざまな楽しみ方の指向や遊び方の形態が登場したり、スキー施設を地域振興の資源として見直そうという動きがある。しかしその一方で、スキー市場の低迷という状況も広く認識されている。

こうしたスノースポーツをめぐる状況の中で、スノーボードに押され気味であった（アルペン）

スキーは、カービングスキーという用具の開発を迎えた。それにより、スキーヤーに新たなスキー体験の喜びを提供することやスキー初心者が比較的容易にスキーを楽しむことが可能になった、といわれている。さらに、カービングスキー同様、板の短いスキーボードが開発・改良され新しいスノースポーツとして紹介されている。また、この用具の改良には、カービングスキーが影響を及ぼしている。

スキーボードとは、欧米における短いスキー板の総称であるが、日本ではファンスキーという呼び名が存在する。ファンスキーとは、日本で生まれた言葉であり、日本独特の歴史を持っている。その原型は、ヨーロッパで生まれ、もともとは下山用の登山用具として開発されたもので、短いフォルムが今に受け継がれている。(白川, 2002, p.8) 日本には1980年代後半に伝わり、ショートスキーやミニスキーとして親しまれていたが、1990年代前半になり、「ショートスキーの販売促進を行う組織」という団体が、もっと身近に親しんでもらおうと、これらの総称を「ファンスキー」と銘々した。(白川, 2002, p.8, p.138)。商品名、あるいは店頭における分類としては、スキーボードやスノーブレード、ファンスキー、ショートスキーなどが見受けられる。また、板の幅が広いビッグフットもファンスキーに属するものといってよいであろう。それらの形状は、大きく2つに分けられる。一つは、板のトップとテールが同じであるツインチップ形状(写真1)であり、もう一つはテール部分が切り落とされているテールカット形状(写真2)である。それに加え、最近のノーマルスキー(注1)にも見られる傾向であるが、ビッグフットをはじめとして板の幅にいくつかのバリエーションがある。

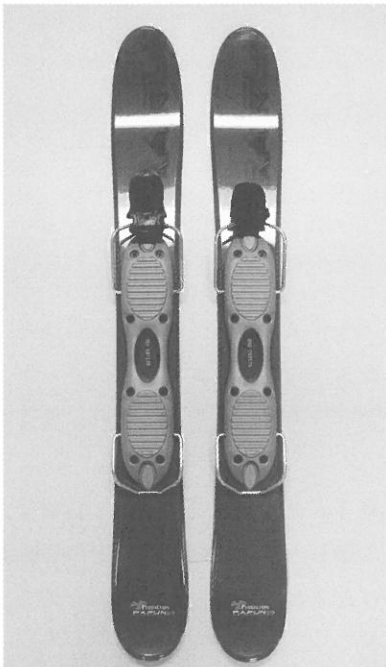


写真1 ツインチップ形状

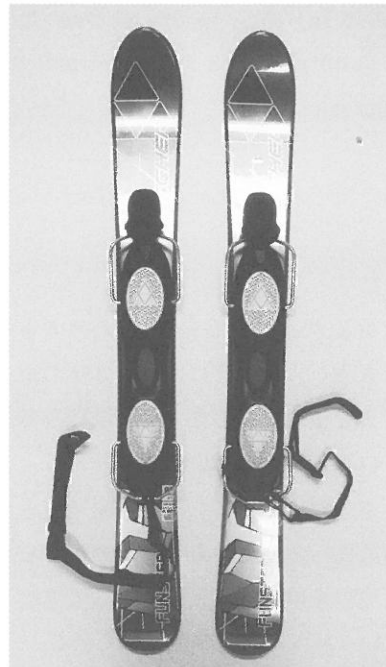


写真2 テールカット形状

この用具について、持ち運びが便利なこと、初めてスキーをする人にとっては、今までよりも短時間で滑走できるようになること、上級者には長さの割には性能が良いためカービングの練習にも役立つことなどの利点が指摘されている。そしてそうした利点に基づいて、この用具を用いた学習プログラム（注2）の提案も少なくない。例えば、リーガー（2001）、ボルテ他（2003）、バッハ（2004）、渡辺（2003）や伊藤（2002）そして白川（2002）などの提案があげられる。それらには大きく二つの立場が見られる。一つは、アルペンスキーの滑走技術を高めるためのツールとしてスキーボードを捉える立場であり、もう一つは、スキーボードによる滑走それ自体を楽しむことを主眼とする立場である。（注3）

本研究では、学校体育における新しいスポーツ種目の導入という点を射程に入れ、こうした2つの立場によるスキーボード学習を支えている前提について考察することを目的とする。

II. 「滑走技術を向上させるツールとしてのスキーボード」という考え方を支える前提

スキーボードは、細かい動きを使わずに曲がれるようになることが最大の利点として示されている。従来、普通のスキー板の長さでは、曲がるのが難しく、それゆえ「外脚に乗る、外脚を曲げる、外脚をひねっていく、などの練習にとても時間が必要だった。」（渡辺、2003、p.32）こうした認識は、滑ることができるようになる物理的な時間の量の長さを意味していることにとどまらず、滑ることができるようになるまでにはある程度苦労や努力が必要であるということを含んでいる。また、指導する方法の限界をも内含していると解釈され得る。さらには、こうした努力や苦労の必要をできるだけ避けたいと思っている人々、つまり、手軽にスキーをしたいと思っている人々にとっては、従来の用具によるスキー活動は退屈や苦痛を伴うというイメージや実体験により、スキー活動に積極的になれない理由の一つになっていたり、実際行わないというスキー活動との関係を形成していたという傾向の理解もうかがわれる。

こうしたことを背景として、スキーボードでは、板が短いゆえに滑走スピードが抑えられ、余裕を持って練習でき、なおかつ初心者にとってパラレルから学習可能であること（リーガー、2002；バッハ、2004）、「内側を向いて、内側に傾くといったおおざっぱな動きだけで曲がれる」（渡辺、2003、p.32）こと、直接スキーボードによるこの動きがカービングターンの動きにつながる（伊藤、2002；渡辺、2003）ことがその利点としてあげられている。つまり、「飛んだり跳ねたりして遊ぶだけでなく、上達を早めるアイテム」（渡辺、2003、p.35）として認識されているのである。また、スキーボードが、その短さゆえバランスを取ることが難しいとしながらも扱いやすいことと、後ろ向きに滑るなど、これまで普通のスキーではできなかったことまで簡単にできて、慣れてくるとバランス感覚やエッジング感覚など、普通のスキーに結びつく要素が非常に多いことにスキーヤーが気づく（伊藤、2002、p.113）という指摘からも、ターンの感覚を身につけるツールとしてその利用が考えられていることがわかる。

以上のような初心者のノーマルスキーへの（迅速な）移行や上級者のノーマルスキーの滑走技術

向上のための練習を想定したスキーボードの活用による学習が提案されている。以下では、この学習が、どのような前提に支えられているのか見ていくことにする。

我々は、運動を学習する際、その手がかりとなる情報をさまざまな形で得る。指導の観点からは、大きく言語による指導、視覚的な指導、筋運動感覚的な指導として、提供する情報の視点を分けている。(杉原, 2003, pp.75-99) スキー指導において、もっとも代表的なものは、従来視覚的な指導であり、学習者が学習しようとする運動を実際に指導者がやってみせるという示範やデモンストレーションと呼ばれている方法が、現在も多く採られている。それは、通常、運動技術を直接説明したり、動きのイメージを引き出す言葉を用いてアドバイスするといった言語教示を織り交ぜて、指導者は動きのモデルを提示するという指導実践の形になっている。つまり、視覚的な指導は、当然のことながら言語による指導を介在させて行われている。

また、筋運動感覚的な指導も経験的に様々な方法が工夫されている。筋運動感覚とは、主に手足など身体部位の位置関係、運動の方向や速さ、力の入れ具合など自分の体の動きを感じ取る感覚を意味し、それに着目した指導とは、目標とする動きを実際に体験したり、筋運動感覚に注意を向け自分が実行する動きの感覚を敏感に感じ取ることができるようにするなど、筋運動感覚的な情報を利用して行う方法である。(杉原, 2003, p.94) スキーの指導では、指導者が幼児や初心者の方のスキーボードの先端を持って一緒に滑走する身体拘束法や、親が子どもを後ろから抱えて一緒に滑る反応強制法が見受けられる。(注4)

一般的に人間は、諸感覚の中で視覚が優位であることが指摘されている。ヴルフ(1999)は、エリアスやフーコーの研究に学びつつ、歴史的人間学の立場から、現代社会においてますます人間が生とのかわりの中で、近距離感覚(触覚、味覚、嗅覚)の代わりに遠距離感覚(聴覚、そして特に視覚)重視の方向へと進み、身体がイメージとして理解されるようになってきていることを指摘する。現代社会では、一連のIT革命が視覚の優位性とそれに伴う「身体のイメージ化」を一層加速化していることはいうまでもない。ヴルフの指摘は、この点を言い当てている。また心理学の立場から、工藤(1987b)は、この視覚の優位性が運動の場合にも当てはまることを指摘している。つまり、通常の運動学習においては、視覚的な情報に依存した形で学習が進行するということである。

スキー指導において、示範やデモンストレーションが重要視されてきた背景には、理論的にはこの人間の運動における視覚優位性、実践的には経験的にそうした方法が効果的であるという手応えと認識があったと考えられる。その一方で筋運動感覚情報の重要性は、実践場面でも少なからず意識されていたのではないかと、それは、先述した身体拘束法や反応強制法から、動きのイメージを引き出す言葉やシュプールの確認などによる間接的な筋運動感覚への働きかけを意図した運動感覚強調法に至るまで、細かく見ていくと指導場面で様々な方法が指摘できるからである。

運動学習において、「普通に練習をしていると視覚的な情報に依存した形で学習が進行してしまい、運動を微妙にコントロールするのに必要な筋運動感覚情報がほとんど無視されてしまいがち」(杉原, 2003, p.98)になる。こうした問題を背景にして、「通常では意識されにくい筋運動感覚に積極的に

注意を向けて練習する方法が工夫されてきた」(杉原, 2003, p.98)といわれている。スキーボードは、こうした経緯の中で、指導実践の側から、滑走技術向上のためのツールとして有効であるとされ、それをを用いた学習の提案がなされていると考えられる。それは、板が短いゆえに滑走スピードが抑えられ、余裕を持って練習できることやバランス感覚やエッジングの感覚など、ノーマルスキーと結びつく要素が多いと認識されている点からうかがわれる。また、ボルテら(2004)が、ビックフットと他のウィンタースポーツの用具に関する運動能力の構造的関係を整理し、スキーボードの学習プログラムの提案をしていることが、これも筋運動感覚情報を重視した立場から、滑走技術向上のツールとしてスキーボードを用いる学習を構想していると考えられる。

ところで、猪俣(1981, pp.74-75)は、筋運動感覚的指導のなかで動作の始まりと終わりの時点における「身体部位の位置感覚」、あるいは「動きの感じ」を教示によって強調する運動感覚強調法について、初級や中級程度の技能レベルでは、微妙な動きの感じをつかむことに無理があり、有効な方法とはいえ、不明確な運動感覚でも弁別できる高度な技能レベルの競技者に限って有効であると指摘している。しかしながら、スキーボードの開発・改良により、バランス感覚やエッジング感覚など、普通のスキーに結びつく要素が非常に多いことにスキーヤーが気づく可能性が高まったために、こうした指摘は当たらなくなっていると考えられる。

さらに、スキーボード学習には、成功感と失敗感のバランスへの配慮(注5)という観点もあろう。スキーを享受していく過程や長きにわたり親しむというライフスタイルにおいて、できるだけ初期の段階から達成体験や成功体験を味わうことが重要な因子であることは一般的に認められている。それゆえ、短いために扱いやすく細かい動きを使わずに曲がれるようになったり、後ろ向きに滑るなど、これまで普通のスキーではできなかったようなことまで簡単にできることが利点として指摘されていることは、滑走技術の向上によるスノースポーツ全般への肯定的な見方や積極的な取り組みへの期待が込められていると考えられる。

Ⅲ. 「スキーボード自体の楽しさ」についての学習を支える前提

今日スポーツは、普及と細分化を進めながら全体として発展している。それは、スポーツ独自の力学で進められているのではなく、個人の欲求、社会的・経済的関心、文化的前提、人々のレジャー行動の変化、政治的・経済的関心などと結びつき、影響力を発揮していた意味や価値の変化が互いにかかわりながら、大きな影響力や魅力、そして国際性と発展力学を備えた独自のスポーツ文化を生み出している。(グルーペ, 2004, p.13)すでに述べた楽しみ方の指向や遊び方の形態、そしてそれに伴う用具などが多様化しているという状況から、スノースポーツも例外ではないことはいうまでもない。

そのなかで、スキーボードでは、さらに内的な多様化という様相が見られる。詳しく述べると、短い板の形状や特徴、ならびに志向性からノーマルスキー(アルペンスキー)だけではなく、スノーボード、フィギアスケート、スピードスケート、モーグル、ならびにインラインスケートの楽し

さやおもしろさをミックスしたようなスポーツが、日本ではファンスキーとして捉えられ、楽しみ方が提案されているのである。そしてその代表的なものとして、スキーイング、スケータイング、パイプ、トリックライディング、カービング、エアの6種類が紹介されている。(白川, 2002, pp.20-21) また、バックカントリー(注6)の提案がなされている。さらには、競技会も存在する。その代表的なものは、クロスゲーム、チャイニーズダウンヒル、ワンメイクなどのエア、スロープスタイルをはじめ、ハーフパイプ、クォーターパイプ、ナスターレースなどである。(注7)

こうしたさまざまな遊び方の提案に盛り込まれたメッセージとして、自由自在な滑走により自己表現もさまざまにでき、個性を発揮できるということ(白川, 2002, p.20)が指摘されている。このことは、「ファンスキーヤーにとってゲレンデは、ショーの舞台になり得る」(白川, 2002, p.20)という表現からも読み取ることができる。また、遊び方と相まって、現在板の形状や幅などにもさまざまな種類があり、その選択もスキーボード(ファンスキー)の楽しみとして考えられている。さらには、遊び方(滑り方)とは直接関係のないファッションやスタイルについても提案(白川, 2002, 28-31)に事欠かない。このように、スキーボード(ファンスキー)の楽しさをめぐる多次元な提案がなされている。では、こうした傾向の背景にあることがらをどのように理解することができるだろうか。

スポーツは、その量的な普及とそれと結びついた組織的、構造的変化によってのみ変化するのではなく、それを行う人間の動機やスポーツ観と活動を結びつけている意味とも連動しながら変化する(グルーベ, 2004, p.19)といわれている。今日では、人々をスポーツに向かわせる動機は、達成と競技、共同体を求めてというよりは、身体経験、身体表現、身体美、健康、安寧、気晴らし、娯楽(グルーベ, 2004, p.20)とかかわりあっている。つまり、前者のような動機と結びついたスポーツ観に限定されない、新たなスポーツ観が生み出され、それに特別な意味が見いだされている。それは、一方では、高い成果の獲得を目的とした身体の道具化、特殊化、規律化を生み出す形態であると同時に、他方では美的観点からの身体形成や身体の演出、身体表現、身体体験ならびに身体経験を生み出す形態からナルシスト的に身体を享樂したり、自分自身で上手にそれを公演する形態にまで至っている。(グルーベ, 2004, p.21)もちろん、この状況と密接に関係しているのは、経済的関心であり、商業ベースのスキーボード普及戦略であると考えられる。それは、先述したように、日本においてファンスキーというネーミングを伴ったスキーボードの導入経緯から明らかである。

こうした視点からスキーボード自体の楽しさについての学習を考えると、若者のライフスタイルとの関連の中で創り出されている新たな文化の体験や経験と、そうした面と巧みに関係づけられたスノースポーツの新たな起爆剤としてのスキーボードのトレンド攻勢(注8)、および商業ベースに乗った消費体験が渾然一体となってプログラムとして提案されていると理解できる。つまり、若者文化というサブカルチャーに関連した新たな文化の提案と、それに伴う新たなスポーツの判断基準の生成、およびそれらと連動した商業ベースの文化提案とその消費が背景にあると考えられる。スキーボード学習が、若者文化と深く関わっていることは、先述した多様な遊び方の提案とスタイル

の提案から容易に認められよう。プリンクホフ（1993）は、新しいスポーツ種目は、独自の若者文化を代表していると主張し、そこでは若者文化の促進と消費がなされているという。その若者文化とは、独自の価値設定とスポーツ活動を特徴づけた、快楽主義的で、身体能力を重視した、一風変わった、奇妙な面とそうで内面を併せ持ったものであるという。（プリンクホフ、1993、pp.22-25）スキーボード学習自体を楽しむ学習の根底には、若者文化を味わい、同時に活気を与えるということがあることがみえてくる。

さらにそこには新たなスポーツの意味、ないしは判断基準の生成がうかがわれる。通常スノースポーツは、雪という障害を克服することにその魅力が存在するが、スキーボードは、その魅力を自由な感覚や発想とも深くかかわらせている。つまり、基本的には雪という障害を克服することに魅力を認めながら、克服する過程において自己表現や個性のアピールを強調しているのである。ここに、新たなスポーツ動機的一端がみられる。そして、現代社会において、一方では意味の不在や存在の不安にとまどい、他方ではナルシスト的で、快楽主義的でもある人々やそういうイメージをまとった若者に対して、自己表現や個性のアピールによる自己の存在証明をスキーボードというスポーツで成し遂げようというメッセージを読み取ることができる。

また、別の背景もうかがわれる。それはレジャー活動のなかで興奮を探求するというライフスタイルである。現代社会は、人前で激しく興奮することに対する社会的規制や自制が増大している（エリアス、ダニング、1995、p.89）といわれている。エリアスとダニング（1995）は、こうした「感情の抑制や慎重さを要求する現代社会では、自由に表される激しくて、楽しい感情の範囲は厳しく制限されている。多くの人々にとって、職業上の生活ばかりでなく、個人的な生活においても、同じことが繰り返される。・・・したがって、かれらの緊張、緊張度、活力、それを何と呼ぼうが、それらは低下するのである。単純な形態であれ、複雑な形態であれ、低いレベルであれ、高いレベルであれ、余暇活動は、しばらくの間、日常的な繰り返しのなかでしばしば欠けている激しくて、楽しい感情の高揚をもたらしてくれる」（エリアス、ダニング、1995、pp.129-130）という。パイプ、トリックライディング、エアなどの遊び方やバックカントリーの提案、そして競技種目は、こうした点を内に秘めていると解釈できよう。また、バルツら（1994）は、クルツ（1990）が提示したスポーツにおける6つの意味のパースペクティブに依拠し、新しいスポーツ種目を6つに分類している。そのなかでは、リスクを冒すことや冒険、そしてその際高いレベルで危険に犯されている身体と関係している自然の中でのスポーツ活動を、リスクスポーツというカテゴリーで分けて（バルツ他、1994、p.20）、その学習の意味を指摘している。ここにもエリアスとダニングの視点、つまりレジャー活動における興奮の探求を背景とした現代社会におけるスノースポーツへの意味づけが見て取れる。また、それは同時に、個々のスキーボードという新種のスポーツの学習可能性をも示唆していると考えられる。

IV. まとめ

本研究は、学校体育における新しいスポーツ種目の導入という問題を射程に入れ、アルペンスキーの滑走技術を高めるためのツールとしてスキーボードを捉える立場と、スキーボードによる滑走それ自体を楽しむことを主眼とする立場、という2つの立場によるスキーボード学習を支えている前提について考察することを目的とした。その結果、以下のことが明らかとなった。

まず第一に、アルペンスキーの滑走技術を高めるためのツールとしてスキーボードを捉える立場による学習では、運動学習における視覚的な情報の依存による学習の進行に伴う、筋運動感覚情報の軽視による、技術習得とその洗練の限界という問題が背景にある。スキーボードは、こうした観点から、滑走技術向上のためのツールとして格好の用具であったということである。また、スキーボードと他のウィンタースポーツの用具に関する運動能力の構造的関係の理解、例えば、バランス感覚やエッジング感覚など、普通のスキーに結びつく要素が非常に多いことにスキーヤーが気づく可能性が高まったという認識によって、「滑走技術向上のためのツールとしてのスキーボード」という考え方が支えられている。さらに、スキーボード学習には、成功感と失敗感のバランスへの配慮という観点もある。これは、簡単に達成体験や成功体験を味わうことができるという認識に関連している。

次にスキーボードによる滑走それ自体を楽しむことを主眼とする立場による学習では、若者文化というサブカルチャーと関連した新しい文化の創出、それにとまなう新たなスポーツの判断基準の生成、それらと連動した商業ベースの文化提案とその消費が背景にある。さらには、雪という障害の克服という魅力と融合した自己表現を強調する新たな意味づけによって、スキーボード学習は支えられている。また、感情の抑制や慎重さを要求する現代社会、および緊張の乏しい日常生活のなかで、レジャー活動において興奮を探求するというライフスタイルにも支えられている。

さて、スノースポーツの新種であるスキーボードについても、他のいわゆるトレンドスポーツと呼ばれるもの同様、スポーツ教育学の視点から、学校教育において取り上げる可能性を検討することは必要であろう。新しいスポーツ種目の採用やトレンドスポーツの教育的価値をめぐっては、例えば、バルツら（1994）、デートリッヒ（1992, 1996）、シュルツ（1995）、シュヴィール（1994, 2000）、ゼル（2000）が見解を述べている。こうした見解について検討し、スキーボード学習の学校体育への導入の可能性を探ることが、今後の課題の一つとしてあげられる。また、シェラー（2004）に見られるような滑走という運動の枠組みからさまざまなスポーツを関連づけ学習を構想する考え方や、他のスポーツにおける意味経験を重視した学習の考え方について検討し、スキーボードを含むスノースポーツの学習可能性について考えていくことも必要であろう。

注

注1) 最近では、ノーマルスキーの形状は、カービングスキーであり、それが商品として店頭に並んでいる

- 注2) ここでいう学習とは、人々がスポーツを享受する過程の総称として捉える。そして学習プログラムとは、人々がスポーツを享受する過程を意図的・計画的に仕組んだ仕掛けという意味で用いている。こうした点から、学習する対象は、競技者ではなく、各種学校に通う子どもや若者を含む一般スキーヤーである。
- 注3) 日本におけるファンスキームーブメントは、遊び感覚をフルに生かして楽しく滑ることをその旨としていることから、滑走それ自体を楽しみスキー活動に興じるという後者の学習可能性に分けられよう。
- 注4) これらの運動感覚的、より精確に言えば筋運動感覚的な指導の中身やその有効性については、猪俣(1981)、小玉(1987)、工藤(1987a, 1987b)、ならびに杉原(2003)が、言語による指導と視覚的指導におけるそれらとともに述べている。例えば、筋運動感覚的指導における指導者が学習者の身体や手足を持って動かして指導する反応強制法は、学習者にとっては受動的な運動であるがゆえ、実際に自分が運動を行う際には運動感覚情報が微妙に異なってしまうという理由から有効性が疑問視されている面もあるが、学習の初期に良い動きと良くない動きを何度も体験させるという点において効果が期待できる(杉原, 2003, p.95)という記述があげられる。
- 注5) 猪俣(1981, pp.63-64)が示している運動学習における意欲づくりの四原則であり、残りの三つは、練習目標を自覚させる、賞罰を与える、競争場면을導入するである。
- 注6) オフピステの滑走を含むもので設定されたツアーコースに挑戦するプログラムである。遊び方としては、例えば、積雪の具合を判断したり、岩や木の配置に注意したり、林の間をポール代わりにスラロームしたり、倒木を飛び越えたりというように、想像力、危険予知力、技術、経験のアンテナを張り滑走を楽しむものである。(大迫, 2004, pp.2-13)
- 注7) 各種競技を端的に示すと以下の通りである。クロスゲーム：数人同時にスタートして、バンクやキャニオンなどのアトラクションを通過する雪上障害物競走。チェーンニーズダウンヒル：50~100人が一斉にスタートし、ゴールをめざす1.5~3kmの距離競走。ワンメイク：エア(空中のパフォーマンス)を競う競走。スロープスタイル：コース上のアトラクションを通過し演技しながら滑り降りる競走。ハーフパイプ、クォーターパイプ：ファンスキー特有のテクニカルを競う競走。ナスターレース：着順を競うクロスゲームに対して、ポールを通過しながら速さを競う競走。(白川, 2002, pp.128-134)
- 注8) ラムプレヒトとシュタム(1998)は、トレンドスポーツとは、単に新しいスポーツ用具による新しい運動形態のみならず、伝統的なスポーツ概念に対して部分的に裂け目を入れるようなスポーツ理解をアピールすることで特徴づけられると述べ、その発展の位相を5つに区分している。その区分に従うならば、日本におけるスキーボードは、尺度によって位相が異なるものの、第3位相の拡張と成長という段階であろう。

文献

- Bach,I.(2004)Skifahren lernen heißt gleiten lernen.sportpädagogik,28-6:45-48.
- Balz,E.(1994)Neue Sportarten in die Schule.sportpädagogik,18-2:17-24.
- Bolte,K.,Pfitzner,T.,Woznik,T.(2003)Wintersport in der Schule,aber bitte nicht ohne Inline-Skating! - Vom Inline-Skating zum Skifahren-. Lehrhilfen für den sportunterricht, 52:1-9.
- Brinkhoff,K.-P.(1993)Zwischen Ästhetik und Leistungsetik. zum Wandel von Jugend- und Sportkulturen. sportpädagogik,17-2:22-25.
- Dietrich,K.(1992)Der Sport ändert sich -Brauchen wir ein neues Sportcurriculum?In: Erdmann.R.(Hrsg.)Alte Fragen neu gestellt. Hofmann:Schorndorf.
- Dietrich,K.(1996)Kindliche Lebens- und Bewegungswelt im Wandel.In:Schmidt,W.(Hrsg.)Kindheit und Sport -gestern und heute.Czwalina:Hamburg.
- エリアス, ダニング: 太平洋訳 (1995) スポーツと文明化 興奮の探求. 法政大学出版局: 東京.
- グルーベ: 永島惇正, 岡出美則, 市場俊之, 瀧澤文雄, 有賀郁敏, 越川茂樹共訳 (2004) スポーツと人間 [文化的・教育的・倫理的側面]. 世界思想社: 京都.
- 猪俣公宏 (1981) スポーツ技能の練習と指導. 勝部篤美, 桑野豊編著 コーチのためのスポーツ人間学. 大修館書店: 東京, pp.38-75.
- 伊藤秀人 (2002) 伊藤秀人のカービングスキーパーフェクトレッスン. ノースランド出版: 東京.
- 工藤孝幾 (1987a) 視覚的指導. 松田岩男, 杉原隆編著 運動心理学入門. 大修館書店: 東京, pp.186-190.
- 工藤孝幾 (1987b) 運動感覚的指導. 松田岩男, 杉原隆編著 運動心理学入門. 大修館書店: 東京, pp.191-195.
- Kurz,D.(1990) Elemente des Schulsports. Hofmann:Schorndorf
- 小玉耕平 (1987) 言語による指導. 松田岩男, 杉原隆編著 運動心理学入門. 大修館書店: 東京, pp.181-186.
- Lamprecht,M.,Stamm,H.(1998)Vom avantgardistischen Lebensstil zur Massenfreizeit. Eine Analyse des Entwicklungsmusters von Trendsportarten. sportwissenschaft,28:370-387.
- 大迫裕三編集 (2004) ファンスキー Tech File.立風書房: 東京.
- Rieger,P.(2001)Skifahren lernen mit Skiboards. sportunterricht,50:9-11.
- Scherer,H.-G.(2004)Gleiten. sportpädagogik,28-6:4-9.
- Schulz,N.(1995)Inhalte des Schulsports -Ansätze für eine notwendige Revision-.In:Schaller,H.-J.,Pasche,D.(Hrsg.)Sport als Bildungschance und Lebensform.Hofmann:Schorndorf.
- Schwier,J.(1994)Sport in den 90er Jahren Alles Design oder Konzentration auf das Wesentliche? sportunterricht,43:294-297.
- Schwier,J.(2000)Schulsport zwischen Tradition und kultureller Dynamik.sportunterricht,49:383-387.

- 白川大助（1999）〔滑れる・飛べる・決まる！〕ファンスキー楽勝ブック．青春出版社：東京．
- 白川大助（2002）痛快ファンスキーの楽しみ方．ノースランド出版：東京．
- Söll,W.(2000)Zum pädagogischen Stellenwert von Trendsportarten.sportunterricht,49:377-382.
- 杉原隆（2003）運動指導の心理学．大修館書店：東京．
- 渡辺一樹（2003）スキー上達BOOK．成美堂出版：東京．
- Wulf,Ch.(1999)Historical Anthropology and Educational Studies.Education for the 21 C.pp.44-56.

（2004年10月31日受付）
（2004年12月25日受理）